

ちひろ美術館・東京
美術館だより

No.176

2012.3.1



ちひろと香月泰男 一母のまなざし、父のまなざし

●2012年3月1日(木)～5月20日(日)

協力：香月家、香月泰男美術館、山口県立美術館、講談社

後援：杉並区教育委員会、中野区、西東京市教育委員会、練馬区教育委員会、武蔵野市教育委員会

香月泰男 小さなものへのまなざし

香月泰男は、身近にあるあらゆるものをモチーフとして描いた画家でした。郷里の大津高校で美術教師を務めていた頃、生徒が校内のどこを、どのように描くか悩んでいると、「現在いる場所で、周囲にあるものを手当たり次第描いてみたらどうか」とアドバイスをしたといいます。どんなものも絵になり、描けるという画家としての自信と、見逃してしまいがちな、小さなものにも美を見出す目があったからこそその言葉でしょう。油絵や水彩画といった洋画を描きながら、余白の多い背景に描かれた小さな生き物の絵は、日本画をも思わせます(図1)。

晩年の冬、制作の合間の気分転換として、香月は身近な廃材でオモチャをつくり始めます。元々手先が器用でしたが、完成したものを妻や家族に見せると喜ばれたことから、どんどんその数は増えていきました。どことなくユーモラスであり、手をあまり入れない形のなかにも対象の本質をとらえている様は、彼の絵画作品にも通じる場所があります。

いわさきちひろ 小さなものへのまなざし

かわいいもの、小さいものをこよなく愛したちひろの絵のモチーフには、花が頻りに選ばれ、他にも猫や犬、小鳥が登場します。そして必ずといっていいほどそこには、子どもも共に描かれています。子どもと花、子どもと小さな生き物

と共に描くことにより、その対象のはかなさ、愛おしさが強調されているようです。また、時として「小さなものたち」が、自分たちのみにわかる会話を、お互いに楽しんでいるかのように見えることもあります(図6)。ちひろは筆をにぎっている間、描かれている子どもや花となり、日常から離れた世界を楽しんでいたのかもしれませんが。

香月泰男 家族への想い

画家として厳しい姿勢をつらぬいた香月は、家族、特に子どもに対しては甘い父親だったようです。両親の愛に恵まれなかった子ども時代の寂しさを、自分の家族には味あわせたくないためか、何より自分が人一倍寂しがりやであったためか、家族への想いはひとしおでした。戦争中に当時満州北部にあったハイラルに配属され、時間を見つけては毎日のように郵便ハガキを描き、家族へ送っていました。「ナホキノリッパナエヲミテ オトウサマハオドロキマシタ ゲンキデ オカアサマノユハレルコトヲヨクキイテ ヨウチエンニユキナサイ。」(図3)という文には、我が子の成長を思う父としての想いと、遠く離れて会えないもどかしさを感じられます。無事家族の元に届いた361通のハガキは、日々欠くことなく描き続けたという画家の執念と、家族と繋がっていたいという願いの両方のあらわれでした。

1967年に初孫が生まれてから、香月は母子像、父子像を繰り返し描き、少ない色数で親子愛を象徴するような作品を生み出していきます(図4)。

いわさきちひろ 家族への想い

ちひろは、日々スケッチを重ねていましたが、そのなかには身近な家族を描いたものもみられます。多くの人に見せるための仕事の絵とは異なり、そこにはちひろと描かれた人々との私的で親密な時間が、かいま見えます(図8)。画家仲間のデッサン会で描く人物画とは異なり、大切な家族との時間を記録するスナップ写真のような一枚一枚には、画家ちひろの鋭い視線と同時に、妻であり母であったちひろの温かい視線がありました。

「私の家は、主人の母や私の母やいろんな人の寄り集まっている雑居家族なので、仕事が多くなって大変なんですよ、そのことで文句を言うと、主人が、そんなこと言ったって、きみ一人になったら、きみはさびくしくって、生きていられないよって。みんな言うの、なんのために絵を描くんだろうと思うようになるって。」というちひろの言葉からは、大家族を取り仕切る苦勞と自信、そして家族への愛が感じられます。

ちひろと香月。ふたりは、それぞれの絵を通して、現代を生きる私たちに、大切なものは何か、と問いかけてくるようです。(松方路子)

●展示室4

東京開館35周年／安曇野開館15周年記念 ピエゾグラフによる「わたしのちひろ」展
東京：2012年3月1日(木)～5月20日(日) 安曇野：2012年3月1日(木)～5月8日(火)

今年、ちひろ美術館・東京は開館35周年、安曇野ちひろ美術館は開館15周年を迎えます。これを記念し、両館で「ピエゾグラフによる『わたしのちひろ』」展を同時開催します。

皆さんからちひろ作品のリクエストを募集し、寄せられたメッセージをちひろの絵とともに展示するこの参加型展示会は、2004年のスタート以来、全国各地で開催され、好評を博してきました。これまでに集まったメッセージ総数は29000通余りにのぼり、今もなお、ちひろの絵が多くの人々の心に生き続けていることを伝えています。

東京会場では、今までにいただいたメッセージに加えて、新たにリクエストを

募り、長年美術館を支えてくださった地域の方々や友の会のみなさん、近隣の小中学生、著名人から寄せられたメッセージなどを、ちひろのピエゾグラフ作品*とともに展示します。ここでは、寄せられたメッセージの一部をご紹介します。

「何かやさしい気持ちになれます。子どものころ母が出版社に勤めていました。教科書のさし絵、キンダーブック、あらゆるところにちひろさんの絵がありました。僕にとって、母のような存在です」(図1・秦聖喜)

「ぶくぶくとした手ざわり、汚れなき眼、母になったころの気持ちが蘇り、思わず微笑みます。同時に三十数年たってもつきぬ子らへの心配、親心とはこうい

うものなのでしょうね。大好きな一枚です」(図2・アカシ)

「ちひろさんの作品には帽子が多い。子どものころ、母もよく帽子をかぶっていました。子どものころの自分も帽子をかぶったときは、大人っぽく、すました顔をしていた。この横顔は、そんなころを思い出します」(図3・KOKO)

「わたしはこのえを見たとき、赤ちゃんにとってもピンクがにあっていて、赤ちゃんの体ぜんたいが、サラサラしている気がすごかったです。フワフワしているてんしの子どものような気がしてきます。うさぎちゃんもそれを見まもっている気がしました」(図4・松岡小晴 小1)
(川口恵子)

香月泰男 小さきものへのまなざし、家族への想い



図1 かまきり 1962~1967年
香月泰男美術館蔵



図2 椿花 1970年



図3 ハイラル通信
第255信 (複製)
香月泰男美術館蔵



図4 母と子 (駄々子) 1968年

いわさきちひろ 小さきものへのまなざし、家族への想い



図5 春の花と子ども 1970年



図6 チューリップと猫と少女 1960年代半ば



図7 少女と小指にとまった小鳥 1972年

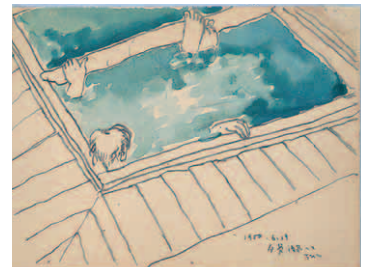


図8 白骨温泉 入浴する夫・善明 1950年

●展示室4



図1 バラと少女 1966年



図2 おつむてん 1971年



図3 青いつば広帽子を持つ少女 1969年



図4 ピンクのうさぎとあかちゃん 1971年

*ピエゾグラフとは ちひろ美術館では、現時点でのちひろの作品の色合いや風合いをデジタル情報として保存し、最新技術の「ピエゾグラフ」という方法によるデジタルアーカイブと、「ピエゾグラフ作品」としての複製に取り組んでいます。耐光性のある微小インクドットによる精巧な画像表現は、繊細な水彩画の再現性を飛躍的に高め、明るい光のもとでの絵の鑑賞を可能にしました。

「谷川俊太郎と絵本の仲間たち 一堀内誠一・長新太・和田誠一」展報告

「谷川俊太郎と絵本の仲間たち」展（展示会期：2011年10月26日～2012年1月29日）は、谷川俊太郎さんと“一緒につくりあげていく”展覧会となりました。

会場に出品された絵本作品すべてに、谷川さんが書き下ろした解説コメントが掲示されました。原画と共に作者自身のコメントを読むことで、作品の新たな魅力や、三者三様の画家の個性がよりあざやかに浮かび上がってきました。「マザーグース」の翻訳をひとつのきっかけに、ぼくはノンセンスということに自覚的になりました。意味（センス）はもちろん大切だけど、意味にこだわりすぎると、意味を超えた〈存在〉の質感（テクスチュア）が失われる。ノンセンスは意味をはぐらかすことで、世界の肌触りに触れようとする動き。」（谷川さんの書き下ろしコメントより）

もうひとつ、今回の展覧会のために谷川さんが書き下ろして下さったのが「俊みくじ」。全50種類もある、谷川さんのことばのおみくじです。後援の各出版社の協力を得て、作者のサイン入り絵本などが当たる、谷川さんの遊び心たっぷりの「当たり」付おみくじとなりました。

展覧会に合わせて、各種イベントも開催されました。“絵本の仲間”のひとりであるイラストレーター、和田誠さんのイベント、「対談 谷川俊太郎×和田誠」（11月12日）から、その一部を紹介します。

* * *

会場からの質問 絵本は1冊、どのくらいの時間でできるのでしょうか？

和田 まず先にテキスト、つまりストーリー、文章なんです。それを、たとえば谷川さんとの絵本なら、谷川さんが書く時間というのがあります。それを受け取ったぼくが、今度は絵を描く時間というのがあります。そして、それを印刷所に渡して、印刷所が印刷する時間があって、それをさらに製本して本にする時間があって、それらをトータルしたものが“絵本が生まれる時間”です。だから、必ずしも何日間とか、そういうふうには言いきれないんですけども……。早いときはどのくらいですか、谷川さんは。

谷川 本によってずいぶん違いますね。だけど大体は、第一稿を書いて、それから綿々と推敲します。少なくとも1ヵ月くらいは。テキストを紙に書く以前に、どういう絵本をつくるか考える時間というのがありますよね。それも含めると、相当時間的にはかかると思うんですけど。

和田 そうですよね。それから、そうやって谷川さんが書いたテキストがぼくのとき

ろに来る。こういうお話だったらどういう絵にしようか、と考えるわけなんです、谷川さんのテキストの場合、ぼくはあんまり悩まないんです。つまり、あつという間にひらめくんですね。谷川さんのテキストが、ぼくにすごく合うんです。たとえば『あな』という作品は、ずっと固定カメラで、全部縦割りの画面構成なんです、そういうのも、谷川さんのテキストを読むとすぐに絵が浮かびます。どういう画材でどういう描き方にしよう、というのはあつという間に決まるんですが、実際に絵を描くには、それなりの時間がかかります。それらを全部プラスして、1冊の絵本ができるんですね。ぼくは谷川さんに「こういう描き方をしようと思うんだけど、どうですか？」なんて言ったことは多分一度もないですね。

谷川 うん、ぼくも和田さんに向かって「こう描いてほしい」と言ったことはないと思う。ただ待ってればできてきて、全然それに文句のつけようがないくらいぴったり、という感じでずっと一緒に仕事をしていますね、和田さんとは。



* * *

続いて開催されたのが「対談 谷川俊太郎×内田也哉子」（11月26日）です。初めての子育てのころ、絵本選びで悩んでいた内田さんに谷川さんがしたアドバイスとは……。対談の一部を紹介します。

* * *



内田 谷川さんと初めてお会いしたのは朝日新聞の対談だったんですが、そのときまだ、私は最初の子を産んだばかりで。どうしても自分の好みで絵本を選んでしまっ、おどろおどろしいものが好きなので、そういうものばかり子どもに与えちゃうんです、という話をしたんです。そうした

ら谷川さんが、「いや、それでいいんだよ」って。「親はね、偏ったまんまでいい、好きなものだけどんどんどんどん与えてればいい」と言って下さったんです。子どもはそれだけを与えられたときに、逆にそうではないものに興味を持つこともあるし、むしろ縛られた枠があるからこそ、そこからはみ出したいとか、それだけではない違うものが見えてくる、そういう教育もある、っていうようなお話をされています。

谷川 えっ？ ぼくそんな立派なこと言いました？（笑）

内田 そのころ、初めて親になったばかりで、「親ってこうでなきゃいけないんじゃないか」「こうありたいな」っていう理想が自分のなかにあったんですね。でも、そんなことは人間到底できないだし、もう、あなたの好きなものだけ与えなさいって言って下さったんです。

谷川 ほんとにそうだと思いますよ。

内田 それですごく気が楽になったんです。同じ遺伝子で、同じ夫婦から生まれた3人の子どもたちでも、今、それぞれ違うものに興味があつて。

谷川 ああ、それはいいですねえ。

内田 親が計算してできることって、ほんのわずかなことなんですよ。ありがとうございます、あのときは（笑）。

谷川 今聞いても、それはなかなかいいこと言ってるなあ（笑）。

* * *

対談のほかに、小学生向けのイベント、「谷川俊太郎×谷川賢作 ことばと音楽であそぼう！ 谷川親子による子どもワークショップ」（2012年1月8日）が午前（低学年）・午後（高学年）の二部構成で開催されました。初めは緊張していた子どもたちも、『これはのみのびこ』や『とき』など、谷川さん自身による絵本の読み聞かせや、「おならうた」などの詩の朗読に笑い声があちこちから聞こえてきました。そのほか、歌詞の一部を考えて替え歌をついたり、ちひろの絵を見て詩を書き、発表したり、学校の授業とはひと味違う、ユニークで貴重なひとときを過ごしました。

番外編として、会期中、館内のお手洗いに谷川さんの詩を掲示しました。紹介した詩は40篇余り。改めてその作風の幅広さや新しさに触れることができました。「トイレで気軽に詩を読んでもらうのが夢」とユーモアたっぷりに話していた谷川さん。80歳を迎えてなお、好奇心とアイデアにあふれ、いきいきと絵本や子どもたちと向き合う姿に、大いに刺激を受け、心を動かされました。（川口恵子）

ひとこと ふたこと みこと



10月28日(金)

被災地に住んでいます。とにかく、とにかく忙しく過ぎた7カ月でした。思いきって休みを3日取り、ここにいられたことに感謝して絵を見ています。こんなにゆっくりとした時間を過ごすのは本当に久しぶりで、絵を見ているうちに涙がこぼれてきます。ここでちょっぴり、リフレッシュしていきます。また来たいです。(つやこ)

11月3日(木) 文化の日

今日は時間があつたので母と美術館に来てみました。ゆったりした雰囲気包まれて、いわさきちひろさんの絵はとても穏やかでした。谷川俊太郎さんの詩や堀内誠一さんの絵は、小さい頃から親しみが懐かしかったです。小学校時代、読んでくれた先生に手紙

でも出そうと思います。とても良い1日になりました。夕方からのアルバイト、頑張ります！(Limi)

11月26日(土)

次男と2人で来ました。ちひろさんのアトリエ、昭和40年代の匂いを感じさせる懐かしい情景でした。僕の周りにもこんな雰囲気、部屋、あつたなあ。息子をほったらかしにして、1人感慨にふける父でした。(H.信太郎)

2012年1月3日(火)

あけましておめでとうございます。ちひろ美術館にお正月から来られる私の自由！幸せを感じます。世の中、大変なことばかりで……。ちひろ美術館へ来て、好きなちひろさんの絵をじっくり見られる幸せ。ぜひたくです。心の豊かさを感じます。(豊島区 F.C)

〈谷川俊太郎と絵本の仲間たち展〉

外はとても風が冷たく寒いですが、ここに来るとポッと暖かくなるんです。長さんの絵がとても好きです。谷川さんの詩には、いつも勇気をもらっています。(くじら)

* * *

すてきなえですてきな文がたくさんありました。いろいろつかいかたもきれいでした。またここにきてゆっくりみたいです。(かな7歳)

* * *

私はこの部屋の展示の横にある谷川さんの言葉がすごくいいと思います。1つ1つの作品や、谷川さん、和田さんという人をよく知らない私たちに、谷川さんが話しかけて、説明してくれているような気持ちになりました。今日は来てよかったです。(25歳公務員・女)

美術館 日記



11月14日(月) ☼

「ちひろの白」展にちなみ、植栽担当が白を基調とする花を吟味。庭の寄せ植えにはフランネルフラワー、エントランス脇にはオキザリスを選ぶ。来週は、ちひろのように春の花壇の彩りを楽しみにしながら、チューリップの球根を、その上にパンジーを植え込む予定。

11月25日(金) ☼

子育て支援をテーマとする企業・NPO・自治体の見本市「こども未来東京 Messe」へ初参加。子連れで気軽に楽しめる美術館であることを、一般の来場者(2671人!)にアピール。都内の子育て支援関連団体とも知り合うことができ、大変有意義な機会となった。子どもを取り巻く環境をよりよくするため、今後も互いに情報交換をしながら、協力して取り組みたい。

12月11日(日) ☼

無料感謝デーは今年で5回目。普段の平日の約10倍となる1262人も来館者をお迎える。混みあう館内でも気持ちよくお過ごしいただけるよう、例年以上に現場に配置するスタッフの人数や見回り回数を増やして安全対策をとる。

12月13日(火) ☼

今年から地元・下石神井4丁目地区のまちづくり協議会のメンバーとなり、毎月の会合で地元の現状と課題の把握に努めている。このたび発表された、地元住民によるアンケート調査結果で、「シンボルとして残したいもの」第1位にちひろ美術館が選ばれ、大変光栄。地元が誇りに思えるような活動を、今後も心がけてゆきたい。

1月2日(月)・3日(火) ☼

ちひろの水彩技法を体験し、きれ

いなにじみの部分を切り抜き、マグネットにするワークショップを開催。なかには、12月27日放送のBS日テレ「ぶらぶら美術館・博物館」をご覧になり、「上京するならちひろ美術館」とわざわざ福島から来てくださったご一家や、おひとりでも5つもつくった方も。

1月6日(金) ☼

ちひろ美術館友の会が、2013年3月末で35年の歴史に幕を下ろすことに。新しく発足する支援会員制度の説明も兼ねて開催する「つどい」の申し込み第1号は、友の会会員更新回数34回の方だった。感謝の気持ちでいっぱい。

1月18日(水) ☼

入館券が、約10年ぶりで新柄(佐藤卓さんデザイン)に切り替わる。日替わりで4種、どれに当たるかは、ご来館時のお楽しみ。

窓

開館35年、ドキュメンタリー映画をつくる

松本由理子(ちひろ美術館 顧問/財団事務局長)

「ちひろのドキュメンタリー映画を製作する話も進み始めている」と初めて記したのは、2004年3月の美術館だよりNo.137。「没後30年 ちひろにかえる」と題したこの「窓」の欄だった。

2000年に山田洋次監督が当財団の3代目理事長に就任されたことも大きかった。2002年に記録映画『平塚らいてふの生涯』が公開され、未来へ伝えていく手段として映画という選択肢もあるのだと教えられた。

だが、いざ、誰にお願いしてつくるのかとなると、お願いした方のご都合もあり、なかなか決まらないまま、数年がたった。

開館30年の準備をするなかで、生前のちひろを間近で知っている方が、いかに少ないか、あらためて思い知らされた。将来映画にすることも念頭に置きながら、まずは縁の方々の証言を記録しようとお願ひしたのが、当時30代の海南友子さんだった。

2006年から始まった「証言」の記録は、昨年で50人近くに達した。取材記録が送られてくるたびに、知らなかった20代のちひろ、30代のちひろがいまいきと立ち上がる。何より、ちひろの絵にさほど心惹かれることのなかった20代30代の製作スタッフが、ちひろの言葉を読み、証言を起こしな

がら、「涙が流れてしかたがなかった。ちひろの『絶対にあきらめない生き方』に深く励まされた」という。

「このままではもったいない。何らかの形で人に見てもらえるものをつくらせてほしい」との海南さんの熱い思いを受け、監督・海南友子、エグゼクティブプロデューサー・山田洋次でちひろのドキュメンタリー映画製作を決定。若い彼らだからこそ、その感性と切り口で、ちひろの生きた時代を知らない、今の若者たちの心にも届く作品をつくってくれることだろう。公開は、開館35周年にあたる今年7月、乞うご期待。

●次回展示予定 2012年5月23日(水)～8月26日(日)

ドキュメンタリー映画公開記念展
いわさきちひろ (仮)

苦難を乗り越えながら絵を描き続けたちひろの人生を紹介する映画が、この夏、劇場公開されます。本展では、映画のなかで紹介される数々の作品のほか、日記などの資料を、ちひろのこぼれ、ゆかりの人々の証言とともに紹介します。



緑の風のなかで 1973年

ちひろ美術館コレクション
奇想の絵本 - 夢幻とナンセンス -

ちひろ美術館コレクションから、「夢幻」と「ナンセンス」のふたつのテーマに沿って、奇想の絵本の魅力を紹介します。カーライ、パツオウスカー、スタシス、長新太等が描く新鮮な驚きに満ちた絵本の世界をお楽しみください。



ローベルト・ブルン 「12ヵ月のおとぎ話」より 1989年

ちひろ美術館・東京イベント予定

<http://www.chihiro.jp/>

各イベントの予約・お問合わせは、ちひろ美術館・東京イベント係へ。TEL.03-3995-0612 E-mail chihiro@gol.com

●〈特別展示〉「光の鳥」FUKUSHIMA ARTプロジェクト

2011年3月11日の東日本大震災で大きな被害を受けた福島県いわき市で、美術家・吉田重信と地元の人たちが自主的な復興支援のためアートプロジェクトを立ち上げました。いわき市の人々のメッセージを携えた「光の鳥」と、市民の声を記録した映像「IWAKI-心のこたま」が東京にやってきました。



○会 期：3月1日(木)～3月25日(日)
○会 場：図書室

●FUKUSHIMA ARTプロジェクト関連イベント
講演会「福島県いわき市 震災の現場から」

福島原発の事故に見舞われ、放射性物質による被ばくを強制されたいわき市で、いのちと健康を守るために市民有志が「いわき放射能市民測定室」を開設しました。活動に取り組む測定室の代表が、現在のいわき市の復興の現状や、これまでの測定データを報告します。

○日 時：3月11日(日) 15:00～17:00
○講 師：織田好孝(いわき放射能市民測定室代表)
○定 員：70名 ○会 場：展示室4・多目的展示ホール
○参加費：700円(入館料別、高校生以下は入館料無料)
○要申し込み [2月10日(金)受付開始]
(2月は休館中のため、HPまたは電話03-3995-0772からお申し込みください。)

●FUKUSHIMA ARTプロジェクト関連イベント
吉田重信ワークショップ「光の鳥」

光の鳥のはがきに自由にらくがきし、展示したあと、家族や友人に郵便で届けます。幼児から大人まで対象。

○日 時：3月10日(土)14:30～16:00 / 3月11日(日)10:30～12:00
○講 師：吉田重信(美術家)
○定 員：各回30名 ○会 場：展示室4・多目的展示ホール
○参加費：200円(入館料別、高校生以下は入館料無料)
○要申し込み [2月10日(金)受付開始]
(2月は休館中のため、HPまたは電話03-3995-0772からお申し込みください。)

●ゴールデンウィーク期間の開館情報

ちひろ美術館・東京は、2012年4月28日(土)～5月6日(日)まで、休まず開館いたします。またこの期間は18:00まで延長開館します(最終入館17:30)。皆様のご来館を、心よりお待ちしております。

●「ちひろと香月泰男」展関連イベント
特別対談 野見山暁治×大石芳野

画家の野見山暁治と、写真家の大石芳野が、いわさきちひろと香月泰男が生きた時代と芸術について語り合います。

○日 時：4月7日(土) 16:00～17:30 ○定 員：80名
○会 場：展示室4・多目的展示ホール
○参加費：1000円(入館料別、高校生以下は入館料無料)
○要申し込み [3月7日(水)受付開始]

●「母の日」特別企画 松本猛ギャラリートーク

いわさきちひろの息子・松本猛が、母の思い出や作品にまつわるエピソード、展示のみどころなどをお話します。

○日 時：5月13日(日) 14:00～
○会 場：展示室内 ※参加自由

●ちひろの水彩技法ワークショップ
にじみでつくるおひなさまのカード

ちひろの水彩技法を体験し、それをおひなさまの着物にして、オリジナルのカードをつくりまします。



○日 時：3月3日(土) 11:00～15:00(最終受付14:30)
○会 場：2Fエレベーター前
○参加費：200円(入館料別、高校生以下は入館料無料)
※申し込み不要、当日参加受付(混雑時は整理券を配布)

●わらべうたあそび

声を出して歌ったり、体を動かしたりしながら、親子で楽しく参加できます。0～2歳までの乳幼児と保護者対象。

○日 時：4月21日(土) 11:00～11:40
○会 場：図書室 ○定 員：各日15組30名
○講 師：服部雅子 ○参加費：無料(入館料のみ)
○申し込み：[3月21日(水)より受付開始]

●ギャラリートーク

毎月第1・3土曜日14:00より展示室にて、作品の解説や展示のみどころなどをお話します。

●えほんのじかん

毎月第2・4土曜日11:00より展示室にて、作品の読み聞かせなどをおこないます。(参加自由) *授乳室もご利用になれます。

CONTENTS

- 〈展示紹介〉ちひろと香月泰男-母のまなざし、父のまなざし- / 開館35周年記念 ピエゾグラフによる「わたしのちひろ」展...②③
- 〈活動報告〉「谷川俊太郎と絵本の仲間たち-堀内誠一・長新太・和田誠-」展報告...④
- ひとことふたことみこと / 美術館日記 / 窓「開館35周年、ドキュメンタリー映画をつくる」...⑤

美術館だより No.176 発行2012年3月1日

ちひろ美術館・東京